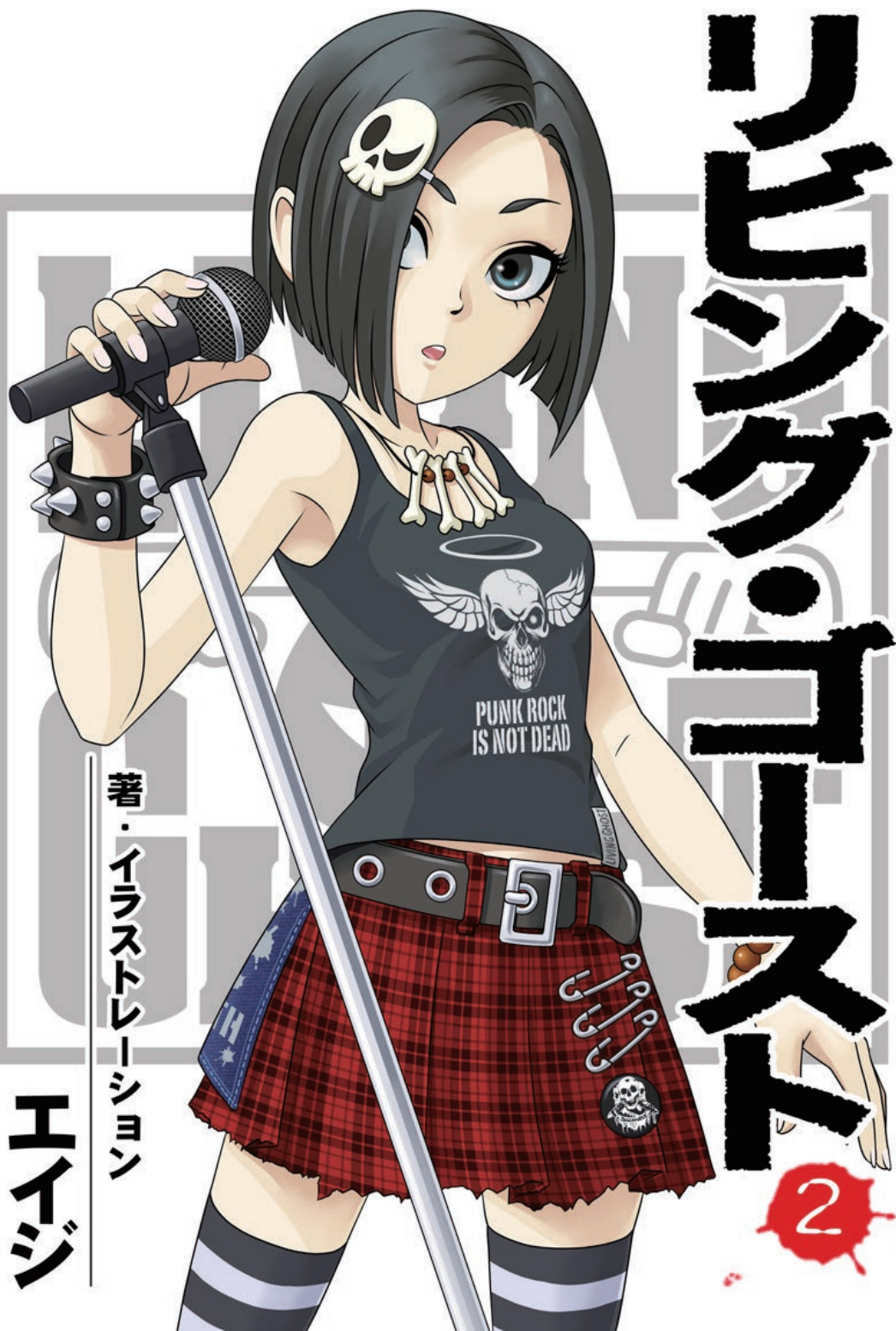


リビング・デッド

2



著・イラストレーション

エイジ

自宅近辺の繁華街をあてもなくブラブラしているレイとチャコ。草葉の陰の世界を見る事ができるようになったレイにとって、普段見慣れたこの街の風景に溶け込んでいる幽霊たちの様子を観察するのはとても興味深かった。人間観察ならず、幽霊観察というやつだ。

幽霊たちは建物や車、人などのあらゆる対象物をすり抜けて自由に歩いていた。変わったヤツの中には、地上数メートルあたりをのんきそうにふわふわ浮かんでいる者や、可愛い女の子をニヤニヤしながら見つめている者、信号機の上にちょこんと座り、足下を走り抜けていく車の列をボーッと眺めている者、それぞれの幽霊たちが自由気ままに、それぞれの個性に応じたゴーストライフを楽しんでいるようだ。

一般的にレイ達の生者の世界という草葉の陰というのはお墓の下を意味し、じつとりと湿度が高く、暗いイメージの言葉だったが、あの世の住民達の呼ぶそれは何ともお気楽でのんびり

した世界のようなのだ。

それぞれの幽霊は何らかの目的や理由があつてこの世界にとどまっているということらしいが、今レイの目の前で好きなように行動している幽霊達を見ると、案外深い理由や因縁などは無いのではないかと思えてくる。そんな風に思わせる妙に楽しいな雰囲気があるそこにはあった。

そうして、小一時間チャコと街をブラブラしていたレイは、本来の目的……そう、バンドメンバー探しという大事な用を思い出した。

「ねえ、チャコ、ところでメンバー探しは……」

レイはチャコに途中まで話しかけたところで、あわてて口をつぐんだ。周囲の人たちが少しびっくりしてレイを不思議そうな目で見たからだ。

——そっか、周りの人にはチャコがみえないんだっけ。じゃあどうやってチャコに話しかけたらいいんだろ?——

レイが困った表情を浮かべているのを見かねてチャコが話しかけてきた。

「声に出さなくてもいいから頭の中で話しかけてみて」

レイの頭の中に直接チャコの声が響いた。レイが声に反応してチャコの顔を急いで見ると、

今話しかけてきたその口は全く動いていなかった。そして、チャコは笑顔を浮かべながらその口を動かさないまま言葉を続けた。

「あたしらはね、別に喋らなくても会話出来るんだよ。 うーん……簡単に言うとテレパシーとかそういうやつかな、レイもやってみて。 簡単だから」

そんなこと急に言われたってそんなもののいきなり出来る訳ない。

昨夜チャコが化け猫になって現れて、翌日には幽霊だらけの街を見て、そしてお次はテレパシーときたもんだ。年末恒例世界の超常現象3時間スペシャル番組じゃないんだから、いくらなんでもこんな短時間の中でちよつと詰め込み過ぎだ。

——んなもん、急に出来る訳ないじゃん。 無茶言うなよ——

そう、考えた瞬間、チャコが即座に返答した。

——うん、それでいいよ。 出来たじゃん——

レイはあつけにとられてキョトンとした表情を浮かべた。

——えっ、今の聞こえたの？——

——大丈夫。 ちゃんと聞こえてるよ。 簡単だろ？——

なんてことだろう、ちよつと頭の中でチャコに文句を言っただけなのに、無意識のうちにチャ

コに考えている事が伝わってしまったようだ。こんな状態じゃヘタなことを頭の中で考えられない。レイはこのプライバシーのない状況に焦りを感じた。

——ねえ、チャコ、あたしが頭の中で考えている事って、全部チャコにわかつちったりするわけ？ ——

レイは一番心配なことを覚えてたのテレパシーでストレートに聞いてみた。

——考えている事はわかんないよ。 普通の会話と同じで相手に話しかけるような感じで、伝えたいと思わなきゃ聞こえないよ。 あっ、あのコかわいくない？ ——

チャコは道路脇の植栽の間をそそくさと走り抜けて行く白い野良猫を目で追いながら適当なノりで答えた。

——ふうん、そうなんだ。 じゃあ、変に緊張しないで普通にしていればいいんだよね？ ——

レイはすでに安心出来る答えを聞けたにも関わらず、念を押すようにもう一度チャコに言葉を送った。

——そう、そう。 普通でいいんだよ。 普通で——

チャコは先ほどの白い野良猫を完全に見失ったようで、少し残念そうな顔をしながらレイに答えた。

——口を動かさずに会話出来るって、前に深夜アニメで見たナントカ機動隊みたいで、なんだかカッコイイな——

そう考えた瞬間、レイはあわててチャコを見たが、チャコの言う通り話しかけた思い以外は伝わっていないようだ。まあ、これで心の中のプライベートはひとまず安心だ。

——そうだチャコ、素朴な疑問なんだけど、バンド組んだあとして、どこで演奏するの？……ってゆうか、だれに聞かせるの？ たしか幽霊のメンバーは生きている人には見えないんだよね？——

レイはふと浮かんだ疑問をチャコにぶつけてみた。普通のバンドでは全く考える必要の無い問題が、今これから産まれようとしている自分たちのバンドには山積しているのだ。

まず、幽霊のメンバー探し、こればかりはレイにはどうしようもない、幽霊に友達もいなければ知り合いもないからだ。いきあたりばったりにその辺にいる幽霊に話しかけてヤバイ事になったりするのはゴメンだ。次に演奏場所と聴衆だ。自分以外のメンバーは生きている人間には見えないから、こっちの世界ではアカペラで歌うレイがステージ上で一人ポツンという恐ろしく痛々しい絵を目にする事になる。そんなのは絶対にカンベンしてほしい。

——演奏場所は心配しなくていいよ。 レイから見たあっちの世界にも、ライブハウスやホー



ルがあつてね、みんなそこで演奏をしてるんだよ。結構デカイ規模のからちつこいのまでいろいろあるよ。――

生きている人間のレイからすれば興味津々などんでもない話をチャコは自分の首筋を右前足もしくは、右手と思われる部位の先端にある鋭い爪で猫っぽくバリバリ掻きながら答えた。

――えっ、ウソ！ あっちにもライブハウスとかあるの？ すっごい行つてみたい！――

――あるよ。 みんなちっちゃいハコから地道に初めて、人気が出て来たら、どんどん大きなハコに移動して人気絶頂に達して最後に行き着くのは……――

チャコがやけに含みを持たせ勿体ぶるように間を空けた。

――えっ何！ 何かすごいハコがあるの？――

レイは小さな子どものように好奇心満々で眼をキラキラさせながら妙に得意げな表情のチャコに質問をぶつけた。

――なんてトコだと思う？――

チャコはいたずらっ子っぽい笑顔を浮かべながら、レイへの答えをじらせた。

――そんな事わかるわけじゃないじゃん。クイズじゃないんだから早く教えてよ。――

仕方ないなあ、これだから素人は困っちゃうよね……と、言わんばかりの嘲笑するような

表情を浮かべた後、その偉大なるハコの名前を一字ごとに区切るように力強く発音した。

――武・道・館！――

その名を発したチャコはやけに得意げな表情を浮かべながら鼻からフンと息を漏らした。

――武道館？！ 何言つてんの、武道館はこっちの世界にあるトコじゃん。 ばっかじゃない？――

レイはからかわれた事にちよつとイラつとして、眉間に軽く皺を寄せながらチャコに突っかった。

チャコはやれやれという感じで、ため息をつきながら顔を横に振り、レイに教えるように落ち着いた口調で語った。

――あっちにもあるんだよ、武道館が…… こっちの世界とあっちの世界はなんていうんだっけ、そうパラソルワールドって言う関係でさ――

――いやいや、それを言うならパラレルワールド――

オカルト用語に詳しいレイが間髪入れず、間違いを訂正した。

――あっそうそう、そのパラレルワールドみたいな関係で結構世界観が重なっているんだよ。で、あっちの武道館もこっちと同じように音楽やっている幽霊達にとっちゃすぐ特別

な場所だね、みんなあそこを目指して頑張っているんだよ。あそこで納得出来る演奏をして、

来てくれたヤツらにイイ音を聴かせてやるためにね――

チャコがいつものダルそうな雰囲気では無い、いつになく真剣な眼差しでレイの眼をまっすぐに見つめながら話した。レイをからかっている訳ではなさそうだ。

――へえー、そうなんだ。なんかすごいトコみたいな感じだけど幽霊の人たちにとってどういう特別な意味があるの？――

――それは内緒。まあーそのうちわかる時も来るよ。――

チャコは少し寂しそうな笑顔でレイへの答えをはぐらかせた。